

ヨハネ10章10-11節 「豊かないのち」

1A 盗人である宗教制度

1B 盗む

2B 殺す

3B 滅ぼす

2A 羊の命

1B 名前を知る方

2B 牧場に導く方

3B 敵から守られる方

3A 命を捨てる良き牧者

本文

ヨハネによる福音書 10 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 9 章まで来ましたが、今日は午後に 10 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、10-11 節に注目します。「10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。11 わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」

イエス様はヨハネ 10 章にて、羊飼いと羊の喩えを語られています。私たちは、羊を飼っている姿は、日本ではほとんど見る事がなく、クリスチャンが、聖書を通して、教会でのみ、羊と羊飼いのことを聞いて慣れ親しんでいます。けれども、世界の多くの地域で、羊を飼う光景は普通であり、日常風景です。イスラエルでもヨルダン、そしてトルコでも、バスが走っているところに羊が百匹とか、群れをなして歩いてくることはよくあります。観光客である私たちはとても喜びますが、現地の人たちにとっては、あまりにも見慣れているので、かえって不思議だなあと思うことでしょう。そこに、羊飼いが必ずいます。杖をもって、後ろから導いていることが多いですね。それから牧羊犬もよくいます。犬が羊の群れを、草のあるところに導くのです。聖書では、旧約時代からしばしば、羊を飼う場面が出てきて、アブラハムの時代から、いや、アダムとエバの息子アベルが羊を飼っていましたね。そして、イスラエルの国の指導者が民を治めることを、羊飼いに喩え、また、詩篇 23 篇にあるように、主ご自身が羊飼いとして喩えられることが多いです。

羊の特徴は、何とんでも、「家畜」でしかないということです。動物には野生の獣もあれば、家畜もありますが、動物園で多くが野生の動物が飼われていますね。野生にもなれるし、人に飼われることもできます。けれども、羊だけは家畜です。知り合いで、いろいろな家畜を仕事で飼育したことがある兄弟がいます。牛は、目の前に大きなハンマーを向けても、よけたりしないそうです。犠

牲のいけにえとして屠られても、抵抗しない様子がよくわかります。羊は？と尋ねたら、「おバカさん」と答えてくれました！何がおバカさんなのか？と言いますと、例えば、青草が隣にあるのに、目の前の草しか食べず、それを食い尽くしても横に草があることに気づきません。崖があれば、そのまま突っ込んで落ちて行ってしまいます。ちょうど、二歳、三歳の子を世話しなければならないほど、なのだそうです。ですから、迷っている羊を探しに行く羊飼いの喩えは、あるある！の話なのでしょう。

それと同時に、羊こそが、頼ることが得意な存在です。10章4-5節でイエス様は、こういわれています。「4 羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。5 しかし、ほかの人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです。」羊飼いに頼り、その声に聞き、ついていくことに能力があります。自分自身で生きることがとても下手な分、羊飼いについていくのはよく出来ます。ユーチューブ動画では、何人かの人羊飼いの真似をして、羊に群れに声をかけます。草を食べている羊は何の反応もしません。羊飼いが声をかけると、みな反応して、全部が羊飼いのところに集まてきます。¹イエス様は、このことを使って、ご自身の言葉を聞き、ついていく者たちを、ご自身の羊に喩えておられるのです。皆さんが、イエス様を信じ、この方に従うようにされているのは、それは羊のようにイエス様の声を聞いたからにほかならず、それについて来ています。誰かに説得されたところで、イエスを信じることはできません。

1A 盗人である宗教制度

前回の学び、9章において、生まれつきの盲人が、イエス様によって目が開かれるという神のわざを経験しました。けれども、それが安息日だったということで、ユダヤ人指導者が彼を連れて来て、その奇跡を疑いました。けれども、疑いようのない事実だと認めざるを得なくなると、安息日に仕事をするようなことを教える者は、人を惑わしてるだけだ、イエスは罪の中にあると断じました。それでも、この元盲人は、さらに大胆にイエスが神からの方であるとはっきりと言いました。すると、会堂から追い出されたのです。ユダヤ人の共同体から追放されたのであり、彼は、村八分のようになってしまったのです。そこに、イエス様がやって来て、この方が神の子キリストであることを知り、この方の前でひれ伏したのです。

つまり、元盲人はイエス様の声を聞いて、この方についてきた羊のような存在であり、イエス様が羊飼いであられます。ところが、その前にこの男のイエスへの信頼を何とかして潰そうと躍起になっていたのが、ユダヤ人宗教指導者らです。そこでイエス様は、その宗教指導者らのことを「盗人」と呼んでいます。神のもとに連れて行かなければいけないはずの宗教指導者が、神の羊を自分のものにすべく、盗んでいるということです。かつて、イスラエルの指導者の姿を主が咎められた時に、やはり羊と羊飼いの喩えを語られました。「エゼ 34:1-3 人の子よ、イスラエルの牧者たち

¹ <https://youtu.be/e45dVgWgV64>

に向かって預言せよ。預言して、牧者である彼らに言え。『【神】である主はこう言われる。わざわざいだ。自分を養っているイスラエルの牧者たち。牧者が養わなければならないのは羊ではないか。3 あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊を屠るが、羊は養わない。』羊飼いが、羊を食べさせるのではなく、羊を自分たちで食べている！と言われています。神の羊たちを、羊飼いが勝手に食べて盗んでいるのです。

1B 盗む

彼らが盗んでいるのは、一つに、「あなたの中で行われている神のわざ」であります。元盲人が、神のわざが彼の内で行われたのに、それを必死で阻み、安息日にそのような労働をしてはならないという掟で縛ろうとしました。神が自分のために行われたことを阻み、自分が神に対して行わなければいけないことを強いらせたのです。みなさんが、「これこれをしなければ、救われぬ。」あるいは「これこれをしていないから、自分は神に喜ばれていない。愛されていない。」と考えるのであれば、それは宗教であり、神のところに行くのを妨げる盗人のようなものなのだとこのことを知る必要があるでしょう。

次に、神があなたに与えておられる力を奪い取ろうとします。主は、ご自身を信じる者に御霊を与えられました。心を一新させて、新しく生まれさせ、聖霊の力によってキリストの命じられていることを行うように召しておられます。神の力によってすべてが前進するのに、自分の力で行わせるように仕向けて、それができなければお前はダメだ、というレッテルを貼るのです。神の豊かないのちを、奪い取ろうとするのです。

2B 殺す

そして「殺したり」と言われます。元盲人を、罪の中にいると定めたのがユダヤ人指導者たちでした。これは、死を意味しています。罪を犯した者は死ななければいけないというのが、モーセの律法です。ですから、神にあるいのちを宗教は死に置き換えることさえします。「Ⅱコリ 3:6 文字は殺し、御霊は生かすからです。」人が、自分のしていることによって神に良く思われたいと願った時に、罪に定められる、罪悪感に支配されます。良いことを行おうと思えば思うほど、自分がいかに、神の律法に従えない、それに違反しているかを知ることになり、自分は死に定められていることを、否応なしに認めざるを得なくなるのです。神の恵みによって救われた人々を、律法の中に置くような仕業を、パウロは「呪われるべきである」とガラテヤ書1章で断じました(1:8 参照)。

3B 滅ぼす

そして、ユダヤ人指導者のしていたことは、「滅ぼしたりする」のです。自分で頑張れば、神からよくされますよという偽りの教えを伝えながら、自分自身も天の御国に入れないばかりか、その教えを受けた者たちをも妨げるとイエス様は咎められました。「マタ 23:13,15 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、

入ろうとしている人々も入らせない。わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは一人の改宗者を得るのに海と陸を巡り歩く。そして改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのだ。」駅前で、冊子を持ちながら人々を入信させようと思っている人々がありますが、それをもって神の国に入れると思っていますが、人々を地獄への道に招き入れています。多くの方は、「誠実なのだから天に行けるでしょう。」と言います。けれども、ある神学者は、「地獄への道は、善意で敷き詰められている。」と言いました。

2A 羊の命

しかしイエス様は、「**わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。**」と言われました。今まで見たものは、盗人の妨げでありましたが、ここに、まことの道があります。具体的に、いのちを持つとはどういうことでしょうか？それは一にも、二にも、「御子のうちにいる」ということであります。「Iヨハ 5:12 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」

1B 名前を知る方

主イエスは、羊飼いとて羊の名を知っておられます。「10:3 牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。」主は、名前を呼ぶほどに羊を知っておられます。羊たちも、羊飼いに知られているので、安心していて、それでその声に聞き従うのです。モーセは、主と顔と顔を合わせて話しましたが、その時に主は彼にこう言いました。「出エ 33:17 あなたはわたしの心にかない、あなたを名指して選び出したのだから。」名指して選び出したというところに、主がモーセを親しく知っておられることがわかります。そして、イエス様は弟子たちに言われました。「ルカ 10:20 あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」自分の名が主ご自身に知られているのです。そして、名が知られていることによって、救われています。「黙 13:8 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。」

2B 牧場に導く方

そして、羊飼いは羊を、牧場に導きます。「詩 23:1-2 主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます。」牧場には、草があります。また、水もあるでしょう。いのちを得ることができ、豊かに得るのは、牧場の食べ物、また飲み物があるからです。

私たちは、何度となく、神の言葉が食べ物であることを教えられています。イエス様の言葉によって、イエス様ご自身を知ることができます。「6:63 **わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。**」主のことばによって、霊のいのちが豊かに与えられます。イエス様は、申命記を引用して、悪魔に対して、「マタ 4:4 人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一

一つのことばで生きる。」と言われました。私たちは、ですから絶えず主とその言葉を求め、愛し、その言葉によって命を保っているのです。

そして、いのちは水を飲むことによっても保たれます。御霊の働きを知ることは死活的です。イエス様は言われました。「ヨハ 7:38-39 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。」私たちはゆえに、絶えず御霊による礼拝を求めています。自分ではなく、主が上から与えられる命です。そしてまこと、真理による礼拝を求めています。つまり、神のことばによって養われていく礼拝です。その中で、羊飼いであるイエス様に導かれ、その命の中に招き入れられているのです。

3B 敵から守られる方

そして、羊飼いが羊のいのちを豊かに与えるのは、敵から守ることです。ダビデが、サウル王に話したことを思い出します。「I サム 17:34-36 しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、35 しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。それがしもべに襲いかかるようなときは、そのひげをつかみ、それを打って殺してしまいます。36 しもべは、獅子でも熊でも打ち殺しました。この無割礼のペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をそしたのですから。」このようにして、羊飼いは自分の体を張って、それで羊を守ります。羊は、ただ羊飼いの犠牲の愛によって、その救いと守りを知ることになります。

3A 命を捨てる良き牧者

それで 11 節でイエス様が言われました、「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」主がご自身の命を捨てるほどに、私たち一人一人を愛してくださいました。自分が羊のように迷い、自分勝手な道を歩んでいる時に、この方はその背きを身代わり負ってくださいました。そのことによって、私たちには命を豊かに持つことができます。